

『摩尼蔵院左学頭御房論義名目』の声点について

梅 崎 光

(1997年10月15日 受理)

On the Tone-marks of “Manizōin Sagakutō Gobō Rongi Myōmoku”

UMEZAKI Hikaru

論義の名目をあつめた文献としては『補忘記』がよく知られており、はやくから日本語アクセント史の資料として利用されてきた。それとともに、この文献が先行する同類の論義の名目類を利用していたらしいことについても従来から指摘されており、そうした文献のうちいくつかは、たとえば桜井茂治氏の『新義真言宗伝「補忘記」の国語学的研究』(1977, 桜楓社)や『中世京都アクセントの史的研究』(1984, 桜楓社)において資料として利用されている。また、名目集として編纂されたもの以外にも、論義の問答形式の本文に声点と節博士とを注した書の本文が石井行雄氏によって紹介^(注0)されるなど、『補忘記』以外の論義資料についてもその実態が明らかになりつつある。しかし「論議関係の資料ははてのつかないぐらい豊富」^(注1)との言もあり、今後も関連する資料の調査が継続されねばならない。最近では、高野山における表白のよみくせについて記録した文献が、金井英雄氏によって、いわゆる出合(アイデア)研究の資料として紹介された^(注2)。

ここにとりあげる『摩尼蔵院左学頭御房論義名目』も、そうした論義における名目を記録した文献である。汲古書院刊『六地藏寺善本叢刊 第6巻 中世国語資料』(1985)におさめられ、ひろく公開されたが、この資料についてその国語史資料としての価値が論じられたことはあまりないようである。ひとつには、これがどういう学統につながる資料なのかが判然としないこと、また、24丁という言語量のすくなさなどがそうした状況の一因なのであろう。しかしながら、この文献には、声点をもってなされた掲出語句の声調表示の方法に特徴的な点があるようにおもわれるので、以下に調査結果の報告をする次第である。

複製本に付された築島裕氏の解題によると、この文献は、「摩尼蔵院左学頭御房、聖深院頼真の口説を中心に、記録した」論義の名目集である。それは、1丁オモテに「摩尼蔵院左学頭御房 聖深房頼真口説如之玄義同ルヲ加之／論義名目 文明十一年ヨリ同十四年至訖」とあって、また、14丁ウラに「離相丸丸 {スル／長亨元} ——玄同入門江益ノ時間十月晦日 義門多運 {玄同} ——長亨二正月十七日聞」とある記事によっている。そして、「この写本は、文明度に記されたものではなく、長亨度、又はそれ以後に記されたもの」とのことである。

このように、聖深房頼真と「玄」と称される人物との口説とが本資料の内容の中心をしめるので

あるが、これ以外の説についての言及も一部みえる。「04B02：終同<lh>厳云／04B04：短促<HT>厳聞本書可見」「04B01：法三<TH>空同／04A06：親疎<RH>シンソ・空義」^(注3)とある、「厳」「空」などがそれであるが、中心をなすものではない。

本資料がいずれの学統のものであるかについて、同氏解題では「高野山系列である可能性が大きい」とされる。摩尼蔵院および聖深院頼真については不明であるが、

一案としては、高野山の左学頭宝性院宥快(1345-1416)の説を承けたものとする解釈の可能性もあろうか。さすれば、宥快の師に頼真があったことが、宝寿院蔵六字護摩私記の奥書に見え、又「高野春秋」元応二年(1320)一二月条には頼真相達房と見える。そして「玄」

は同じ高野山宝性院に在つた玄海(1267-1347)の説と考へるのも窮余の一策かも知れない。という可能性を築島氏は示唆されている。

まず、この文献において使用されている声点の種類をみるに、平上去入の四声の別にくわえて、平声と入声とにそれぞれえ軽と重とを区別しており、さらにフ入声点も使用している。声点の形態は、圈点である。一部(21丁ウラ)に星点ももちいられているが、両者に質的な差はないようである。単点と双点で清濁を区別し、新濁を表示するとおもわれるタテならびの双点も、「06A04：偏習<Rp>」という1例に使用されている。

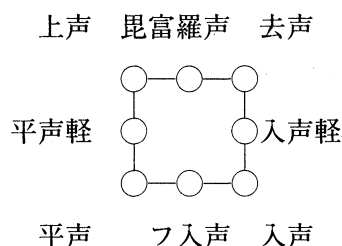
平声軽と入声軽の別に関しては、つぎのような点が注意される。

- a 01A03：階降<Lf>カル 02A03：所尺<LK>カル
b 01B06：詮要<FL> 04A01：機欲<HK>

まず、aのように、軽声点をさしたもののかわりに「カル」という語でさらに注記をほどこしたものがある。だが、すべての軽声についてこのような注記がついているわけではなく、bのように軽声点だけしかないものもある。これは軽声点と重声点との位置が曖昧になるばあいに配慮して「カル」という注記が付されているものとおもわれる。このうちいくつかはのちの加筆のようであるが、この注記の有無に特に有意味な差はないようである^(注4)。

さて、本稿で特に問題としたいのは、字音語にさされた声点のうち、軽声点の性格である。本資料の見出し語には、平声軽点がのべ118例、入声軽点がのべ28例存し、論義関係の資料のなかではかなり豊富な方なのである。

たとえば、『補忘記』下巻所載の点図にはつぎのように



とあって、論義の世界において平声と入声にそれぞれ軽重を区別する伝承のあることをしめす。し

かし実際には、『補忘記』にも、たとえば平声軽点のさされた例は貞享版に5例、元禄版に9例しか出現しない。こうした軽声点出現数の相違はなにゆえ生じるのだろうか。

そもそも、『補忘記』をはじめとする論義関係の資料は、おおむね呉音がもちいられているのであるが、そうした呉音主体の文献において軽声点が登場することは一般にどういう意味をもつのだろうか。もともと呉音の声調体系に平声軽や入声軽という調類は存在しなかったのだが、話線的関係によってそうした声点のしめす調値（下降調や高平調）が登場することはあった。それを六声の体系によって把握した結果、平声軽点や入声軽点もちいられることになったわけであろう。そうした呉音における軽声については、沼本克明氏が調査された結果がある。

沼本氏は鎌倉時代から南北朝期にいたる法華経読誦音資料を調査された結果、「呉音においては、平声軽・入声軽としての軽声調は、単字声調としては存在せず連続上の声調変化の結果として出現するものである。就中、入声軽は入声字（入声重）が上声字または去声字に下接する場合、もしくは、上声字に上接する場合に出現し、毘比羅声の示す声調変化と同じく一種の和語アクセント化と考えてよい」^(注5)と結論づけておられる。そして、そうした環境にない位置に出現する入声軽については、「漢音系字音の混入等によると考えられる」^(注6)と主張されている。

法華経読誦音においては平声軽の例は「一切」という一語にかぎられるものであったが、『補忘記』においては、「一切智智 < TFLL / LFLL > 切ノ字何ノ處ニテモ平声ノ軽也(2)」以外に「三辰 < FH / FL > 三ノ字平声ノ軽、日月星(44)」「金言(キンケン) < Fh / FL > 金ノ字平ノ軽、三井亦同(元54)」「当山 < Fl / HL > 或云当ノ字此時ハ軽也(元69)」^(注7)のように、それ以外の語にも出現している。これらの平声軽点はどういう理由でさされているのかは個々の事情によるのだろうが、音形から漢音であることが明白であり、かつ『長承本蒙求』のような漢音声調資料においても平声軽点がかさされている「金(言)」のような例をふくむことはたしかである。

このようなことから、本資料にみられる平声軽・入声軽出現の理由を考察するにあたって、上接字の声調といった軽声点の前後の環境、漢音の混入という視点からの検討をこころみたい。

まずは、本資料における軽声点の分布をみてみよう。次表は、標目となった漢語において平声軽点と入声軽点が登場する環境を上接字と下接字の声点（および付属語・サ変動詞であるか）で分類し、その数値（のべ数。カッコ内がことなり数）をしめしたものである。なお、以下では平声軽点・平声重点・上声点をF声点・L声点・H声点などと称することもある。

※平声軽 (F) 点

上接字	L	T	なし	K	R	不明			
	60 (52)	23 (19)	25 (22)	2*	1	7	*うち1例はHと併記		
下接字	L	T	なし	付属語	サ変	H	K	R	不明
	4	3	82 (72)	18	7	1	1	1	1

※入声軽 (K) 点

上接字	L	T	なし	R	H	F	不明
	13 (11)	2	5	2	3	1	2

下接字	L	P	なし	助詞 (ヲ)	F	H	不明
	1	1	21 (19)	1	2	1*	1 * P と併記

まずは、例数のおおい平声軽からみる。このように、F声点の分布をみると、上接字はL・T・なしが大部分をしめ、下接字は、なし・付属語（助詞ヲ・ニ・ハ、助動詞ナリ）・サ変動詞が大部分をしめるのである。

ただし、このような分布のかたよりが偶然の産物であって、F声点の大部分が漢音の声調を表示しているという可能性も否定できない。こころみに上接字がL・TでかつF声点のさされた字について中古音の四声と比較してみるとつぎのようになる。平声のみは声母の清濁でさらに二分した(注8)。

※上声：17

02A01：揆／02A02：限 H／05B07：者／04A03：近（去）／06A03：捨／06A07：果 H／06A07：体 H／09B04：倒 H（去）／11A01：死／11B05：可 H／15A02：里 H／18A02：忍／18A04：境／19A03：動／22A01：眼 H／22B01：処 H（去）／22B02：影 H

※去声：22

01B03：勢／01B06：智 R／02A04：性 R／02A06：證／02B02：破 R／02B07：歩 R／03A03：度／03A05：会 R／04A03：化／04B02：記 R／05B06：次 R／06B03：致 R／07A04：至 R／08B06：大 R／11B05：秘／17A01：切／17B07：竟／18A03：義 R／19B05：詔／22B08：印／24B02：数 R（上）／24B03：利 H

※平声：24（清10濁14）

清 01A06：深 F／01B03：身／04B04：詮／05A02：知 F／10B04：清 F／11B01：推 F／12B01：揮／15A08：教 L／19B05：間 F／21B06：要

濁 01A03：降 L／01A04：論 L／02A03：錢 L／03B02：寮／05B06：臣／16B07：累／16A07：情／17B05：流／18A02：源 L／19A07：蹄／21B07：同／22B07：便／23B07：能／24B03：純

さらに、上接字なし、すなわち語頭にある F 声点のさされた字について同様の比較をおこなうと、つぎのような結果となる。

※上声：2

04A01：本／10A07：往

※去声：9

03B01：対 R／05B07：用／10A06：用／10B06：際／14B08：事 R／18A03：霧 R／18B04：案／18B07：例／19A04：自 R

※平声：10（清6濁4）

清 01B06：詮／02A02：鐘 F／03A07：分 F／18B05：湛 H／18B05：端 F／20A06：温 F
濁 16A02：難／19A01：長 L／19B04：同／23A04：荷

以上の結果から、F 声点のうち、漢音の声調がそのまま混入した可能性のあるものは、少数（上接字が L・T のもので 10/63、上接字なしで 6/21）であることがわかる。もちろん子細に観察すると、「19B05：人間<IF>シンカン」「19B04：同日<Ft>トウシツ」のように、音形から漢音であると推定できるものもあるが、逆に「04A03：適化<TF>チャツケ」「04A03：習近<pf>シフコン」「03A05：符会<LF>フェセリ」と呉音形の例も存在するのである。また、K 声点の例であるが、「08B04：不足言<HKl>ケン・仏子間会時仰ラル、玄－漢音也」と、漢音であることをわざわざ注記した例も存し、やはり原則として呉音でよまれることが意識されているようである。結局、これら F 声点の例の多数が漢音であるとはいえないのではなかろうか。

となると、このように遍在していることに意味があるのだとかがえてみたい。そこで、こうした分布のかたよりの意味を考察するてがかりとして、本資料の注記に注目することにしよう。まず、注記において F 声点が出てくる例には以下のようなものがある。

01B04：絶離<tL>依處ニ離 F トカ、ルニヨム也／02A01：二智<LL>依 v 處智 F カル也／
04B04：雜乱<pH>輕雜乱 F・カルニ／20A02：順曉<1H>カル・玄義曉 F ト云フ人モ有

これらは、「離」「乱」といった字の声点が、L 対 F、H 対 F というように 2 種類ありうることを注記している。ここで、04B04 と 20A02 の 2 例以外は、いずれも L 声点や T 声点といった、低平調の声点のさされた字が上接している。そして、「依處」という表現からみて、講者の相違による異説の存在などではなく、その字（又は語句）の出現する環境による交替現象について言及していることがわかる。このような例からも、上接字がこうした環境にあるときに L 声点と交替した F 声点が、先掲の表の分布に反映しているのではないかという仮説がたてられる。

つぎに、F 声点はでてこないが、この問題と関連がありそうな注記をあげる。

02B05：自由< IL >依處カルニヨム・玄同／03B01：一点< XL >転・軽重依處也／04A02：契当< LL >依所当ヲカルニヨム也／06B05：左様< LL >依處様ハカルニヨム也／21B08：例難< LL >軽重依處

以上のような例では、注記においてもF声点が出現するわけではない。しかし、04A02や06B05の例では語末の「当」や「様」を「カルニヨム」と表現しており、ここには、F声点をさすのとおなじ注記意図がはたらいている。「01B07：義相< IL >依處ニ相Lト重ク□□也」のような例は逆に、注記に「重ク」とある点からみて、< IF >とあるべきものの誤点であろう。実際、「02A03：五銭< lf >玄同・依所銭f重クヨム也」のように、掲出形においてはF声点をさしながら、それが「依所」「重クヨム」こともあるということを示した例もある。

さて、ここにみられる「依處(所)」「トコロニヨッテ」という注記は、具体的にはどのように解釈することができるであろうか。ひとつの可能性として、《当該字そのものについて、その字が語彙的にどういう環境にあるかによって声点が相違する》という意味に解釈する余地もありそうである。実際、F声点でもL声点でも出現する字はいくつかある(注9)。

しかしここでは、つぎのような例の存在を重視して、別の解釈をとりたい。

22B02：浅影重テ< LFXX >／22B03：浅影ノ上< LLXX >

この22B02の例のごとく、「浅影」とつぎの語とのあいだにきれめが存するときには、語末の「影」にF声点がさされ、22B03のように、「浅影」が助詞「ノ」を介して「上」という語と結合しているときには、「影」にL声点がさされているのである。助詞「ノ」が下接するばあいに全体が低平調表記になった例はほかにも以下のようなものがある。ここで注目されるのは、上接字がL声点やT声点であっても、助詞「ノ」が下接したばあいは、当該字にF声点やK声点がさされた例がないという点である。

14B06：世智弁聰ノ難< LLIXF >／16A04：浅行ノ菩薩< LIHX >／19A04：穢土ノ草庵< LIXHX >／19A04：布教ノ利益< LLXXX >／19B05：貞元ノ録< LIXK >／19A07：湿化ノ四生< TLXLR >／22A01：大幻ノ謗< IIXX >／22B07：浅智ノ短便< LLXLF >／22B08：宋訳ノ法護< LTXPI >

「依處」という注記も、こうした例を念頭においているのではなかろうか。これに関連して、つぎのような例がある。

06A06：直往< tL >連読ニテ如此也

06A06：迂廻< LL >ウエ・玄同連読ニテ如此ヨム也

ここでは、「依處」F声点となるという注記とは逆に、なぜこれらの語はF声点とはならないのかを説明している。こうした例に見える「連読」という注記は、《これらの語の語末に出ているL声点のさされた字がF声点となりうる環境にあるけれども、実際に論義において使用される文脈では、そこにきれめが存在せずにつぎの語句と結合してあらわれるために、語末の部分がL声点となっていない》ことを表現しているのではなかろうか。

また、つぎの例にみえる「不交替」という語もこうした点に関する注であろう。

08B05：六大普遍< TILL >玄同・不交替也

08B06：普遍ノ六大< LLXTf >カル

ここでは、「六大」「普遍」という語が順序をかえてあらわれる。まず「六大」に着目すると、08B05では< Tl >となってるが08B06では< Tf >と、語末におけるL声点とF声点との交替がおこっている。一方、「普遍」の方は、08B06では助詞「ノ」を介して「六大」と結合しているため「遍」の部分はL声点である。これに対して08B05では下接する要素がないため、「遍」の声点はFでもありうる。しかし伝承においてはL声点のままだということで、「不交替」という注記が付されたと解釈できるのではなかろうか。

きれめが存在せずにつぎの語と結合するという点では、つぎのように「ノ」を介さない、複合語の前項となったようなものも同様の条件をみたしているといえる。ここでも、「五利」「五純」が単独のばあいと複合語前項となったばあいとでF声点とL声点との交替がおこっているのである。

24B03：五利< IF >カル／24B03：五利五純< ILIf >カル

24B03：五純< IF >カル／24B03：五純五利< IIf >カル

そうした点からすると、「10B04：住夜以清< ILLf >カル」といった例の「夜」の部分がL声点字に下接するのにF声点でないことも、「住夜」+「以清」という複合の前項となっていることから説明がつくのではないかとおもわれる。これには、「11B03：下智声聞< IFXX >カル」のような例外があるが、後項の「声聞」に声点がさされていないことが、この部分の境界をより意識した注記であることの証左であり、複合語全体の音調を部分的に表示したものではないため、前項の独立した音調としてF声点がさされているのであろう。

こうした点からみて、「依處カルニヨム」などの表現が意図しているのは、いずれも語末のL声点のさされた字について、《その字をふくむ語全体が論義の読誦において、前後の語とどういう結合をするのか》という環境によってF声点ともなりうることの注記—すなわち、文字単位でなく語単位での交替を指示したもの—であるとみたいのである。

ではつぎに問題となるのは、こうした分布のかたよりが論義資料の声調表示の方式のなかでどんな位置づけをあたえられうるものなのかということである。結論からいえば、このF声点の表記は出合と関係するとみることが可能なのではなかろうか。

以前、『補忘記』に代表される論義資料における出合の記述が、日本漢字音における入声の開音節化について、その時期を知る傍証となるのではないかと論じたことがあるが、このとき前提となっていたのは、《論義の伝承における出合の記述は、中世に生じたとかんがえられるアクセント体系の変化を反映したものだ》ということであった。

しかし、『補忘記』の出合の記述のなかには、和語のアクセント変化とそのままには対応しないようなものも存するのであった。それは、平声（入声）+平声（入声）といったように、漢字の声点のくみあわせが低平調となるばあいにおける譜記の問題である。

京都語における和語のアクセントには、大野晋氏によれば^(注10)、(1)「低低低型→高高低型」という変化（つまり低平調の消滅）がまず生じ、つぎに(2)「低低高型→高低低型」というパターンの変化（語頭低音連続型の高起式化）がおこったという。

これら2種類の変化のうち、(2)のパターンについては、『補忘記』における

造化< LH / FL >(44) 二辺< LR / HL >(8)

といった例にみられるように、和語のアクセント変化以前の型が漢字の声点に、変化後の型が節博士にそれぞれ対応している。

ところが、(1)のパターンについてはこうなっていない。

易断< LI / HH >(1) 意楽< Lt / HH >(2)

界会< LL / HH >(20) 八諭< TL / HH >(5)

出合の規則が和語のアクセント変化を反映したものであるならば、その記述においてもたとえば

易断< LI / HF > 意楽< Lt / HF >

界会< LL / HL > 八諭< TL / HL >

のような声点と節博士との対応がしめされていそうなものである。

しかも、『補忘記』語彙篇といわれる部分において、声点が「平+平」のように低平調表記になるもののうち、「易断」のようにHH型の高平調の節博士が付された例はわずかであり、そのほとんどは声点のみで、節博士が付されていないのである。

また、出合の法則をといた部分では、

一 平ヨリ平ニ移リ入ヨリ入リ移ル者、共ニ平ラニ言フ ν 之ヲ。大智< IL / HH·LL >一密< TT / HH·LL >。但シ平入ノ字モ数字連続シテ成ラハ ν 一句ト ν 共ニ高言フ ν 之ヲ。謂ク、下及六道ト< lpTIX / HHHHL >文、大智舍利弗< ILLLT / HXHHH >之類也。又平入ハ同シ様ニ出合スル也(70)

とあるように、「共ニ平ラニ」として、高平型と低平型の節博士を左右に併記した部分もある。

このように『補忘記』では、「平声+平声」のように声点のしめず音調が低平調の例については一貫性のない記述となっているのである。この点に関してはつとに、桜井氏がつぎのような意見をのべておられる。

さて、こうした【梅崎注:高平調《徴々》と低平調《角々》という節博士の併記】一方で、『補忘記』の編者は、《語彙篇》の方では、最初の十三例ほどに《徴々》という高平調の節博士を付けながら、途中からこれを止めてしまうという中途はんばなことをしている。おそらくこれは、単独では、低平調と高平調とが聴覚的に類似して《徴々》型になりやすかったが、他方、現実には、助詞などが付いたかたちは《●○▽》型や《●●▽》型に変化していたために、高平調の《徴々》型に表記するのを、ためらって結果ではないかと解釈される^(注11)。

桜井氏がこうした結論に達した根拠のひとつに、同書でその内容が紹介された『釈論百条第三重』^(注12)における節博士の状況がある。この文献で、問題の「平声+平声」や「入声+入声」のよ

うな声点が低平型の漢語に対してどのような節博士が付されているかという点と、まず、「434：至要< LL / HH > / 434：視恵< LL / HH >」のように、HH という高平調の節博士を付す例が2例ある。一方、「440：十信ノ< PLX / XHX > / 440：十信ノ< XXX / XHX >」のように、助詞「ノ」が下接して全体が高平調になっているとおぼしき例もある。この2例には節博士が部分的にしかついていないが、「十信ノ< PLX / HHX >」という表記の省略されたものであろう。

そして、桜井氏ものべておられるように、助詞（ヲ・ニ・ハなど）が下接して漢語の末尾に下降調があらわれる例も、「432：観ヲ< LX / HX >」をのぞいてつぎのように数例みえる。これらは、H 声点字・K 声点字が下接する出合のため下降調があらわれる「438：果原満< LIH / XFX >」 / 438：二字條< LLH / XFX > / 438：反徳< LK / FH >」のような例とおなじ出合の原理で節博士が付されているのである。

432：数ヲ< LX / FX > / 432：条ニ< LX / FX > / 432：位次ヲ< LLX / HLX > /
433：地位ヲ< XXX / HLX > / 435：過患ヲ< L1X / XFX > / 438：相順ヲ< LIX /
XFX > / 438：正心ニ< LLX / HLX > / 438：定主観伴ト< ILLIX / XXXFX > / 440：
色相ハ< TLX / HFX >

また、桜井氏は「単独では、低平調と高平調とが聴覚的に類似して《徴々》型になりやすかった」とのべておられるが、つぎのように高起式で最後の1拍が低という節博士の表示になっている単独形の例もある。

432：後智< IL / HL > / 432：義理< IL / HL > / 432：二智< LL / HL > / 432：二智
< XX / HL > / 432：末起< LL / HL > / 432：流派< LL / HL > / 433：二義< XX /
HL > / 434：一義< T1 / HL > / 434：覚悟< T1 / HL > / 434：原理< IL / HL > / 434：
梵語< II / HL >

そして、以下のように、語末に F（徴角という節博士）が付されている例があり、これも上記の諸例と同様の原理にもとづいて節博士が付されているものとみられる。

435：位住< LI / XF > / 435：作用< LL / XF > / 435：所現< LI / XF > / 435：主伴<
LI / XF > / 435：二執< LP / HF > / 435：故得< LT / XF > / 436：六境< TL / XF
> / 438：正定< LI / XF > / 438：定順< II / XF >

こうように、論義の出合において、『補忘記』以外の文献のなかには、和語のアクセント変化と同様の対応を記述するものもあったのである。

『摩尼藏院左学頭御房論義名目』における F 声点の分布も、こうした歴史的な和語のアクセント変化に対応する出合の様相を反映しているのではなかろうか。すなわち、「01A03：階降< Lf >」という例の F 声点は、「低低低低→高高低低」という交替によって生じる語末の下降調を、その下降という特徴のみを表示する目的でさされた声点でなかったか。また、「02B05：自由< IL > 依處カルニヨム」という注記も、この語のあらわれる環境によっては、「低低低→高高低」という交替によって語末に下降が生じることを注記したものとみるのである。

この際に、なぜ「階」「自」にH声点がさされないのかという疑問が生じうるが、本資料（およびそのもとになった講説）においては、伝統的な四声の伝承が基本となっており、その範囲内で、あらたに生じた変化（これを『補忘記』などでは出合と称している）を反映させた表示方法なので、あろう。「階」がH声点だということになれば、元来それが平声（L）だったことは表現できない。声点と節博士との併用ならば、「階<L/H>」という方法で表示できるのであるが、声点のみではそれもかなわない。

また、「03A05：符会<LF>フエセリ」「24B03：五利<IF>」のように、1拍の字にF声点がさされているものが47例もある。これも、「符会<HL>」「五利<HL>」というかたちでは「符」「五」が本来平声であることを表現できないためとられた措置と解されるのではなかろうか。

ひとまずここでは本資料のF声点の機能に関して、《『補忘記』などの他の論義書では声点と節博士とで表わしているところを、この文献では不完全ながら声点のみで表現しようとしているのだ》^(注13)という結論を提示しておく。

さて、先述のように本資料では掲出語句の声調表示はもっぱら声点によっている。『補忘記』その他の名目集のような節博士をもって声調を注記した例は後述の2例をのぞいて存しない。その声点をさした語句の大部分は音読される漢字ごとに声点をさしたものであるが、そうしたなかであってカタカナに声点をさした例も若干ある。最後に、このカナにさされた声点について概観しておく。

カナにさされる声点はLFHRの四種類である。

このうちR声点は、

- (1) 06A06：ナンカユヘソ<RXhHLL>
- (2) 18B02：ナンシキノ<RHhHH>
- (3) 18B03：タンシテ<RXhL>

の3例に用いられる。

(1)(2)について言えば、『観智院本類聚名義抄』の「遮莫ナニカハスル<LHXXXX>」(僧上2)、「何人ナニヒトソ<LHXXX>」(仏上8)^(注14)、『補忘記』の「何ソ</LHL>」「有ソ</LLL>」「何ソノ苦シミカ</LHHHHHHL>」(ともに29)といった例から「ナニ(ン)」は低高型を保ち続けていると考えられる。ゆえにさきにあげた例における「ナン」の(1)<RX>(2)<RH>という声点は、低高のピッチを表示するものと見られる。また(3)の標目の漢字の「歎」にはR声点がさしてある。(3)の例のカナにさされた<RX>も低高を表すものと解釈できよう。つまり「ン」という拍ごとにその高さを表示するのではなく「ナン」「タン」という語頭の第1拍から第2拍にかけてのピッチの上昇を<RX><RH>で表示しているようである。

つぎにF声点は4例あらわれる。いずれも助詞「ト」であるが、これにはL声点例もある。

- 15B08：不可成難ト<XXXLF>カル／16A03：釈此誨大小ト<XLrILF>カル／17A05：究竟ト<LLF>カル／18B05：端ト者<fFX>

02A07：良語トス< LLLH >/02B05：至要トス< LLLH >/18B08：質トシテ< XLXX >
 ここで、なぜ助詞「ト」だけにF声点がさされているのが問題となるが成案をもたない。これはおそらく、和語の声調に関して、

乃和津留留登和行キ違コフ餘ノ仮名毛處ロニ興利天定リハ奈志 『補忘記』(73)
 という歌に伝承されていることがらと関係していよう。

また、声点の位置はF声点ではなくL声点であるが「24B05：十巻 シフノマキ< ILLLL >」の「キ」の仮名の下に「カル」の注記がある。「～ノマキ」という例は他にもあるが、こうした注記のあるのはこの例だけである。なぜここだけ「カル」注記があるのかは不明である。末尾拍の「キ」の声点が< F >であるべきものを誤記したものかもしれない。

さて、『補忘記』のように出合によって漢字の声調を交替させることをといた資料では、伝承された声調を声点で表示し、アクセント変化後のあらたな音調を節博士でしめしていた。そして和語には声点がさされず、節博士のみで音調をしめすことからわかるように、字音の部分とはちがって、アクセント変化以前から伝承された音調は表示されなかったわけである。では、本資料のように基本的に声点しかもちない資料では、その和語の声点のしめすアクセントはどの時代のものなのであろうか。

声点によって識別されるアクセント型がどのような体系をなすかは、声点のさされたカナ(和語)の用例がわずか(音節数や品詞の別を無視してのべ60例)なので帰納することがむずかしいが、この点に関して注目されるのは、本資料にはL声点ばかりさされた低平型の例

(1) 16B02：不足採履 ハイモノヲ< LLLLL >

(2) 18B05：問 トウ< LL >

(3) 18B05：階 キサハシ< LILL >

などがみられる点である。しかし、これらの例が低平型であることからただちに、南北朝期のアクセント体系変化以前のすがたを伝承していると結論づけることはできないようである。たとえば『観智院本類聚名義抄』にはそれぞれ「帯 ハク< HL >」(法中109)「問 トフ< HL >」(法下82)とあり、(1)(2)ともに高起式であることが期待される。実際、(1)(2)とおなじ語句は『補忘記』にみえ、それぞれ「不< /L >v 足ラ< /HH >v 採トルニ< /LHH >v 履ハイモノヲ< /HHHHH >」(20)、「問トフ< /HH >ト」(13)となっている。(3)のキザハシについては、近世初期の例として『平家正節』に「階<上上XX >」(102d・口説)「階(キサハシ)<上コXX >」(323c・口説)があるが、体系変化以前のアクセントは不明である。

この問題に関しては、これらカナにさされた声点が均質的でない可能性もある。というのも、

24B04：四巻 シノマキ< LLLL >

03B06：四生< LR > 04A05：四階< LR >

のように、平声字のあとに「～ノマキ」とついて全体が低平調になるものがある一方

24B04：五巻 コノマキ< HLLL >

11A03: 五供養< ILL > 18A02: 五忍ヲ< IFX >

のように、おなじ語構成で字音部分の声調も同一とかんがえられるものが、「ゴノマキ」という語全体では声調をことにしているものもあるからである。もっとも、この「五」のばあいは、漢音で上声とみられ^(注15)、当該例はそうした漢音声調が表示されているとみることも可能である。しかし、

24B04: 一卷 イチノマキ< HHHHL >

18B06: 一 イチハ< LLH >

のように、ともにカナに声点をさした例で、「一」の部分がHHとLLという対立をしめしているのも不審である。

最後に、節博士のもちいられた例をあげる。

05B07: 晦日 ツモコリ< HHHL >※「ツ」の節博士虫損だがHと判断した。

06B06: 用ニ迷スル< FXRHH >

最初の例は、「晦ツコモリ< LLLL >」(『観智院本名義抄』仏中92)のような低平型から変化してできたものとみることができる。これらは、『補忘記』にも「晦日(ツゴモリ)< HHHL >」(28)、「迷須留< RHH / RHH >」(48)として掲出される。本資料におけるこれらの節博士は、『補忘記』のように節博士をもちいた他の文献からうつされ、加筆されたもののようである。

(注0) 『大疏百条第二重』(新義真言宗智山脈・節博士付き論議資料) 紹介—国語アクセント史資料『補忘記』 解説のために—(『梁塵・研究と資料』6, 1988) および『補忘記』(下巻)の背景—雛形部分の背後にある文献—上(『史料と研究』20, 1990)。

(注1) 馬淵和夫氏「書評:『新義真言宗伝「補忘記」の国語学的研究』」(『国語学』112, 1978) 112頁。

(注2) 金井英雄氏「出合資料としての『博士指口伝事』」(『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』(1992, 明治書院)。

(注3) 本資料からの用例の引用にあたっては、声点をその位置に応じて、左下(平声重) = L, 左中(平声重) = F, 左上(上声) = H, 右上(去声) = R, 右中(入声軽) = K, 右下(入声重) = T, 中下(フ入声) = Pという記号で表示する。濁点はそれぞれの小文字であらわす。所在は、たとえば「4丁オモテ(ウラ)第2行」を「04A (B) 02」のように表示する。

(注4) 軽声点に「カル」という注記をそえる論議資料としては、『補忘記の研究』に紹介された『大疏百条第三重読曲』(永禄六=1563年成立)『釈論第三重読曲』(永禄十二=1569年)がある。

(注5) 沼本克明氏『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(1982, 武蔵野書院) 441頁。

(注6) 同書434頁。

(注7) 『補忘記』からの引用に際しては、声点と節博士を< 声点/節博士 >という順にしめす。節博士は、微 = H, 角 = L, 微角 = F, 角微 = R という記号で表示する。所在は、複製本(貞享版元禄版ともに1962, 白帝社)における頁数。元禄版からのもののみ(元)と表示した。

(注8) F声点のさされた当該字のみをその所在とともに提示する。「眼H」は『長承本豪求』(築島裕氏編, 1990, 汲古書院)において、H声点がさされていることをしめす。「近(去)」は、広韻で去声にも属するという意味である。

(注9) たとえば、以下のようなもの。

・03A02: 共体< IF >/12B01: 發揮シテ名体ヲ< TFXRLX >

・21B06: 律要< LF >/01B06: 詮要< FL >, 02B04: 秘要< LL >

・11B03: 下智声聞< IFXX >/02A01: 二智< LL >, 05A02: 智身< LR >, 05B07: 智者< LF >, 09B07: 四智点道< LLLt >, 13B05: 転識得智< LTTL >, 14B06: 世智弁聡ノ難< LLHFX >

>, 22B07: 浅智ノ短便< LLXLF >

・01B03: 難勢< Lf > 17A04: 浅殻等ノ勢力< LTXXLK >, 22A01: 両勢< LL >

・04A03: 適化< TF > 05A02: 反化身< LIH >, 08A06: 化地部< LLX >, 18A03: 諸化ノ霧ヲ< XLXFX >, 19A07: 湿化ノ四生< TLXLR >

(注10) 「仮名遣いの起源について」(『国語と国文学』27-12, 1950)。

(注11) 桜井茂治氏『中世京都アクセントの史的研究』(1984, 桜楓社) 553頁。

(注12) 桜井氏著書394頁によれば、永禄十(1569)年以前の成立とのこと。引例は同書431~440頁「漢語に付けられた節博士」による。声点・節博士の表示法は『補忘記』のそれとおなじ。

(注13) もちろん、F声点のすべてがそうした意図のもとにさされていると主張するわけではない。本資料におけるF声点の分布を説明するのにもっとも妥当な解釈をさぐってみたのである。「19B05: 人間< 1F > シンカン」のように音形声調ともに漢音のものある。また、「02B03: 着保< kF >」のように、ここで観察した環境にないものにはこうした説明は妥当しないゆえ、個別の考察を必要としよう。また、入声軽についてもこうした機能があるのかいなかについては今後の課題としたい。

(注14) 正宗敦夫氏編『類聚名義抄』(1954, 風間書房)による。

(注15) 『長承本豪求』の第49・62・72行。